

1 主題構成表

主題名「社会正義」（中学校・第3学年） 資料名「多くの命を救った外交官」（杉原 千畝）

<p>■ 内容項目 C (11) 「公正、公平、社会正義」 正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。</p>	<p>■ 内容項目から見た生徒の実態 (意識)</p> <ul style="list-style-type: none"> 誰に対しても分け隔てなく接することや、正義の実現に努めようとする人の生き方に憧れがある。 不正に気付いても、自ら積極的にやめようとまわりに働きかける意識は弱い。 迷いや葛藤を乗り越え、正しいと信じることを貫こうとする意欲に弱さがある。 <p>(要因)</p> <ul style="list-style-type: none"> 面倒なことに巻き込まれたくないなど、自己の利害を優先に考えてしまう。 これまでの慣習や多数の意見に対して立ち止まって考えることが少ない。 正義を重んじることで得られる自他の喜びや達成感を味わった経験が少ない。 	<p>■ 資料の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 本資料には、リトアニアの日本領事館に勤めていた杉原千畝が、迫害を受けていた多くのユダヤ人の命を救うために、外務省の命令に背いて、日本行きのビザを発行するに至る心の葛藤と決断、その後の生き方が描かれている。 ユダヤの人たちを見放すことはできないとビザを発行した千畝の生き方を考えることを通して、人間として正しいと信じることを実践することの尊さに気付くことができる資料である。 ビザを発行することに迷う千畝の思いを考えることで、正しいと信じることで、自分が不利な状況になると、実践することに難しさが生じるという人間の弱さに共感することができる。 後年の千畝の思いを考えることを通して、人として正しいと信じることを実践することの尊さに気づき、自らも進んで実践しようとする意欲を育むことができる。
<p>■ ねらい</p> <p>誰もがよりよく生きる社会を実現するには、たとえ少数であっても、人として正しいと信じたことを実践しようとするのが大切であることに気づき、身のまわりの不正や不条理なことに見て見ぬふりをせず、自ら解決に向けて行動しようとする意欲を育む。</p>		
<p>■ 展開の構想</p> <ul style="list-style-type: none"> 国の規則を破っても社会の正義を貫きたいという千畝の生き方を捉えられるようにする。 「自分が千畝の立場だったら、ビザを発行するかどうか」について考え、人間の弱さや尊さに共感し人間理解を深められるようにする。 千畝がビザを発行することを決断した理由を考えることを通して、自分の利害よりも人間として正しいと信じることを実践することを選んだことに気付けるようにする。また、後年、自分の行いが広く認められた時の千畝の気持ちを考えることを通して、人として正しいと信じることを実践することができるようにする。 日常生活の中で正義を大切に生きるには、どうしたらよいかについて考えられるようにする。 	<p>■ 基本発問（◎中心発問）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ビザを発行することを決断した千畝について、どう思うか。 ○自分が千畝の立場だったら、ビザを発行するだろうか。 ◎千畝がビザを発行することを決断したのは、どういう理由からだろうか。 ○正義を大切に生活するには、どうしたらよいだろう。 	
<p>■ 「私たちの道徳」の活用（授業前・授業中・授業後・活用しない） （活用の仕方）正義感についてのアンケート結果（P162）から、これまでの自分自身の生活を振り返りまとめておく。授業の導入で使用する。</p>		

2 学習指導過程

	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	<p>○自分自身は、正義を大切に生活できているだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰とでも仲良くできるように心がけて生活している。 ・まわりの雰囲気流されて、いけないと思うことでもやってしまうことがある。 <p>○正義を大切にできないことがあるのは、どうしてだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まわりも正義を大切にしていなくて自分もいいたらうと思ってしまうから。 ・あまり深く考えず行動しているから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・誰にとっても正しいと言えることを正義と捉え、正義を大切にすることについての問題意識を喚起する。 ・正義感についてのアンケート（私たちの道徳）をもとに自分の生活を振り返り、意見交流を行う。 ・正義を大切にできないことがあるという意見を捉えて、その理由を問い、正義に基づいて行動することの難しさを共有する。
展開	<p>◇資料を範読する。</p> <p>○「国のやり方はどうであれ、私は人間としてこの人たちを見放すことはできない。」と思い、ビザを発行することを決断した千畝の判断について、あなたはどのように思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビザを発行すれば、自分が罰を受けることは分かっていたと思うが、それでも多くの人の命を救うことを決断したことは立派だと思う。 ・役所に勤める者として、上司の命令に従うことは当然なことだし、同盟を結ぼうとしているドイツのやり方と反対のことをするなんて、いくら正しいことでもできない。千畝はどうしてできたのだろう。 ・外務省という組織の一員として、してはいけないことをした。当時は罰を受けたが、今になって認められるというのはどういうことか。 <p>○自分が千畝の立場だったら、ビザを発行するだろうか。</p> <p>〈決められない〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発行したいが、国に背くこともできず迷う。 <p>〈発行する〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理由もなく殺されることが分かっている放つははげない。 ・ユダヤの人たちは自分を頼っている。同じ人間だ。何とかしたい。 ・ビザを発行すれば、多くの命を救うことができる。 <p>〈発行しない〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外務省を辞めたら、家族を養っていけない。 ・上司の命令は絶対。背けば、自分にとぼつちりがくる。 ・ユダヤ人を見捨てることは辛いけれど、自分の責任を全うすることが務めである。 <p>◎千畝がビザを発行することを決断したのは、どういう理由からだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たとえ自分が罰せられたとしても、人の命を守る生き方を人として選択したいと考えたから。 ・人が殺されると分かっている見逃すことはできない。自分がビザを発行することで多くの人の命が助かるのなら発行するべきだと考えたから。 ・ユダヤの人に永遠に恨まれて生きていくのは嫌だ。恨まれない生き方をしたいと思ったのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の総合的な学習の時間等に千畝について学んだことを振り返り、千畝の生き方から「社会正義」について考えることを確認する。 ・千畝の生き方を肯定的に受け止める発言については、その理由を尋ね、様々なものの見方や考え方に触れさせることで「他者理解」が進むようにする。 ・「自分にはできない」といった発言については、肯定的に受け止めた上で、どの部分が真似できないのかを確かめ、自分自身を見つめさせることで「自己理解」が進むようにする。 ・「発行する」「発行しない」という行為を選んだ自分自身の心を見つめられるよう、判断の理由付けを問い返す。 ・その際、多面的・多角的に考えられるよう、ユダヤ人や千畝の家族、上司の立場から考えたり、その結果どうなるかを推測したりすることを通して、「人間理解」が進むようにする。 ・「私たちの道徳」の『千畝の手記』（P 123）を参考に考えを深める。
前段	<p>【深めの発問】</p> <p>★後年、自分のおこないが広く認められた千畝はどんな気持ちだっただろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人として正しい生き方を選択し行動したことが、誰もがよりよく生きることのできる社会の実現や自他の喜びや達成感につながることで捉えられるようにする。 	<p>【深めの発問】</p> <p>★後年、自分のおこないが広く認められた千畝はどんな気持ちだっただろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人として正しい生き方を選択し行動したことが、誰もがよりよく生きることのできる社会の実現や自他の喜びや達成感につながることで捉えられるようにする。
展開後段	<p>○正義を大切に生活するには、どうしたらよいだろう。</p> <p>仲間と話し合った後、自分の考えをまとめよう。（グループ→全体→個人）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私は、人として正しいこととは何なのかをあまり考えることがなかったが、これからは、自分自身の行動やまわりの行動がみんなのためになっているかを考え、見つめ直したい。 ・よくないことだと思ってもまわりの目を気にして正しいことが言えないことがある。正義を大切にするには、勇気を出してだめだと伝えることだと思う。一人では難しいことかもしれないが、友達に自分の思いを伝え、正義を大切にすることを増やしていきたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時に学習した道徳的価値を日常生活に生かすことができるよう、導入で提示した問題について改めて考える場とすることで、自己の変容を確かめる。 ・方法のみの話し合いにならないよう、考えた際の気持ちや理由を伝え合うことに配慮する。
終末	<p>◇正義を大切に生活することの難しさを述べていた生徒の意見を取り上げ、考えの変容を広める。</p>	<p><変容の見届け></p> <ul style="list-style-type: none"> ・まわりの雰囲気に流されがちな生徒が、「人として正しいことは何かについて、立ち止まって考えたい」と書いている。 ・不正に気付いてもまわりに積極的に働きかけようとする意識の弱かった生徒が、「見て見ぬふりをしないで、小さなことでも行動に移す」ことを書いている。

3 道徳の時間（道徳科）と他の教育活動との関連

<場の内容・ねらい>

<生徒の意識>

<指導・援助>

社会科（9月）
「個人の尊重と日本国憲法」
 ・人間が生まれながらにもつ権利として保障されている基本的人権の意味を考えるとともに、それを保障している法の意義について理解する。
 ・個人を尊重し、共生社会を実現するために自分たちにできることについて考える。
 ・社会の形成者として自ら進んで関わろうとする態度を育てる。

合唱祭（10月）
 ・様々な思いで取り組んでいる仲間がいることを認めつつ、目指す合唱をつくり上げようと、学級全体のことを考えて活動する。

道徳科（11月）
「多くの命を救った外交官 杉原千畝」
 内容項目 C（11）
「公正、公平、社会正義」
 ・誰もがよりよく生きる社会を実現するには、たとえ少数であっても、人として正しいと信じたことを実践しようと努めることが大切であることに気付き、身のまわりの不正や不条理なことに見て見ぬふりをせず、自ら解決に向けて行動しようとする意欲を育む。

総合的な学習の時間（12月）
「ひびきあいの日」
 ・誰一人として寂しい思いをしない学校にするために、生徒会宣言を視点に自分たちの生活を振り返る。
 ・よりよい学校生活づくりの実現に向けて一人一人が実行できるよう、生徒会宣言を更新する。

【日常の活動】
○朝・帰りの会
 ・誰もが安心して生活できる学級にするために、行動している仲間のよさを見付け、認め合う。
 ・学級としての成果や課題を明らかにし、進むべき方向を共有する。
○委員会活動
 ・よりよい学校生活の実現に向けた各委員会の取組の中で、よい姿を認め合ったり、できていない仲間に関わりやすくなるなど積極的に関わることを大切に活動する。

○係活動
 ・よりよい学級をつくるために、分け隔てなく呼びかけたり、言いにくいことも言ったりできることを大切に活動する。

・個人の尊重や基本的人権の考え方について理解できた。他者を尊重することは人として大切な考え方だと思う。
 ・憲法による人権の保障が、社会的弱者を差別などから救うよりどころになっていることが分かった。
 ・差別をなくすために、様々な取組がされている。自分も分け隔てなく人と接することができるようになりたい。

・〇〇さんは、いつも仲間に関わりから積極的に関わっていてすごいな。自分も努力したい。
 ・係として正しいことを貫こうと思っても、みんなにどう思われるかを気にして言えないことがある。

・誰でも正義を貫く際には迷いがあることが分かった。身のまわりの不正や不条理なことに対して見て見ぬふりをせず、行動できるようになりたい。

・正しいことを働きかける時、どんな伝え方をしたら、みんなに分かってもらえるだろう。
 ・今まで、正しいと思っても言いにくいことは言わずに済ませてきたことがあった。言いにくいことも言えるように頑張りたい。

・基本的人権や個人の尊重について、日常の具体的な例を取り上げ、日本国憲法の基本的な考え方を理解できるようにする。
 ・差別問題は、過去の事例や特別な問題ではなく、自分たちの身のまわりにも起こり得る問題であることを捉えることができるようにする。

・差別やいじめ等がないか、生徒の人間関係に留意する。
 ・仲間を大切にすることは、悪いことや間違っていることをした時に、積極的に関わることであることを共有できるようにする。
 ・正しいことが正しいと言える学級経営を目指す。冷やかしかからかいを放っておかない。

・正義を貫く際には、誰もが迷ったり葛藤したりすることがあることを共有し、「人間理解」「他者理解」を深められるようにする。

・生活記録等から行為を支えている生徒の思いを捉え、必要に応じて紹介する。
 ・人として正しいと思うことについて考え行動していることを捉え、価値付ける。

多くの命を救った外交官 杉原千敏

八百津で生まれた千敏の生い立ち

千敏さんは、1900年（明治33年）一月一日八百津町の北山で生まれました。父の仕事の都合で小学校の高学年のころは名古屋に住んでいました。

中学校に進んでからは、英語が得意で、将来は英語の先生になろうと考えていたそうです。

中学校を卒業して早稲田大学に進みました。英語教師になる夢を目指し勉学に励みますが、生活が苦しくなり、国のお金で勉強ができる外交官留学生試験を受けました。一生懸命に勉強してその試験に合格した千敏さんは、ロシア語研修生として、中国のハルビン学院というところへ行きロシア語を学びました。

ロシア語の得意な千敏さんは、外務省の役人になりハルビンの日本大使館に勤めました。

外交官としての千敏の仕事

1937年（昭和12年）フィンランドのヘルシンキにある日本大使館で勤めていましたが、次の年に、リトアニアのカウナスにある日本領事館の領事代理になりました。

外交官となった千敏さんは、ヨーロッパ全体が、いつ戦争になるかもしれないと思い、いろいろな報告書をまとめ、日本の外務省やドイツの日本大使館に送りました。

このころのヨーロッパでは、戦争が始まり、ユダヤ人が危険な目に遭うようになってきました。

戦争が激しくなったため、ユダヤ人が苦しめられることが多くなり、ユダヤ人は住むところをかえなくてはならなくなりました。しかし、ユダヤ人を受け入れるところはヨーロッパの中にはほとんどなくなってしまいました。

ビザを求めるユダヤの人と千敏の決断

1940年7月、千敏さんにとって、ある決断をしなくてはならない出来事が起こりました。

ある朝、いつもは静かな領事館の外側が、何やら物騒がしきでいつぱいになっていました。鉄の門にびっしり人だかりがして何やら叫んでいるのです。

まわりの鉄柵にも、ぐるりと大勢の人たちがかまって大声を出しているのです。

千敏さんは、代表者を領事館の中に招きました。みんなは思いつめた様子で口々に話し始めました。

「ユダヤ人はほかの民族とちがった宗教を信じているので、多くの国から仲間に入れてもえなくなりました。」

「ユダヤ人の仲間は、ほかの人々より一生懸命に働きました。そして、お金持ちの仲間があらわれたので、ほかの国からますます仲間外れになりました。」

「ドイツの指導者が、ユダヤ人に対して、自由なことをしてはいけないと言うようになってきました。そして、そのドイツがポーランドへ攻め込んできたのです。」

「われわれは、ポーランドからこのリトアニアに逃げてきました。でも、ここもすぐに戦争になるでしょう。そうすると、私たちは住むところがなくなるのです。安心して暮らせるところがないのです。」

「私たちは、安全な国へ逃げたいのです。そのために、日本通過のビザをいただきたいのです。どうかビザをいただけませんか。」

ユダヤ人が安全であるためには、ユダヤ人を受け入れてくれるアメリカやそのほかの国に逃げる以外に方法がありません。

ヨーロッパから逃げるために、彼らは、シベリアを通って外国に行くことを望んでいました。しかし、ソ連は、(今はロシアなどいくつかの国に分かれています。)第三国のビザを持っていない限り、シベリアを通ることは認められませんでした。そこで、日本やほかの国のビザがどうしても必要になったのです。

ドイツでは、指導者がただユダヤ人だという理由だけでヨーロッパ中のユダヤ人を殺してしまおうと考えていることを千畝さんも知っていました。それは、人道上から考えて許されることではありませんでした。

おびえた眼で祈るように千畝さんを見つめているユダヤ人の人を見ていると、その悲しみとおそれる気持ちが千畝さんの心に伝わってきました。

ビザを発行する千畝

千畝さんは、これは大変なことになったと思いました。そのころ、日本はもう中国と戦争を始めていました。そのため外国の困った人たちをかばう余裕はありません。日本を通過してほかの国へ向かう人にビザを出す時には、行く国の入国許可をもっていること、そして、そこへ行くための十分なお金を持っていることが絶対必要なことでした。

日本の政府は、逃げていく人たちが、その先に行けないまま日本にいられては困ることを考えていたからです。また、そのころ、日本はドイツに味方して、ドイツ・イタリアと同盟(外国との約束)を結ぼうとしていました。多くのユダヤ人の命を守る行動をとれば、ドイツのやり方にそむくことにもなります。

ユダヤ人たちは、「カリブ海にあるオランダの植民地のキュラソーという島ならば行ける。お金はアメリカなどに住んでいるユダヤたちが集めて送ってくれます。」と言つて、彼らを助けようとしたオランダの外交官たちが作ってくれたキュラソーへ行くための書類を見せました。しかし、オランダはもうドイツに占領されています。オランダの証明書がどこまで通用するのかわかりません。それにこんなに大勢の人たちの遠い国へ行くために必要な、たくさんのお金がすぐに集まるとも思えません。

「日本の外務省はユダヤ人たちにビザを出すことを許さないかもしれない。」と千畝さんは、そう思いました。

「やがて、このリトアニアは、ソ連に占領される。今、ビザを出さなければ、目の前にいるユダヤ人たちは行く所を失い、つかまえられ、殺されてしまうかもしれない。」と千畝さんは考え、迷いました。

「国のやり方はどうであれ、私は人間としてこの人たちを見放すことはできない。」と思いました。

千畝さんは、さつそく東京の外務省に電報を打ちました。

「ユダヤ人たちはどこへ行くのか。正規の手続きができていなくて入国許可証をもっていない者には、ビザを出してはいけません。」という返事がきました。

千畝さんはあきらめずに何度も電報を打ちました。しかし、答えは「規則を守ってビザを出すように」というものばかりでした。

千畝さんは、もう自分の決心を変えずに突き進むことにしました。

ユダヤ人を一人ひとり領事館の中に入れて、その名前を聞いてビザを書く仕事を始めました。

一枚一枚その人のパスポートを調べ、名前・年齢・職業・家族、行き先とその目的などをペンを使って調べをつくり、ビザを書かなければなりませんでした。

毎日、朝から晩までビザを書きます。

次の日も、またその次の日も書き続けました。多くのユダヤ人たちが領事館の外で待っていると思うと、食事をする時間も惜しんで書きました。

いくら頑張っても、一時間に一〇人をこなすのがやつとの仕事です。一日に十時間書いたとしても、やつと一〇〇人。外には、千人を超すユダヤの人たちが待ち続けていました。

指も腕もからだも疲れ、睡眠不足で頭がもうろうとしてしまいスピードも遅くなってしまいます。

千畝さんは、それでもユダヤの人たちのために書き続け、一日二六〇枚のビザを書いた日もありました。そして、八月二日には、東京の外務省から領事館を閉めてドイツの大使館に移るよう命令が出ました。

それでも、千畝さんは、机に向かって書き続けたのです。約二ヶ月の間に四五〇〇枚ほどのビザを書きました。

ビザをもらったユダヤの人々とその後の千畝

千畝さんからビザをもらったユダヤ人たちは、リトアニアからソ連に入るとシベリア鉄道に乗って長い長い旅に向かいました。

ウラジオストクから、日本の船に乗り日本の敦賀港に着いたユダヤ人たちは、その後、神戸、横浜から、自由の国アメリカなど世界各国へと渡って行きました。

ドイツ・イタリア・日本が戦争に敗れ戦争は終わりましたが、ユダヤ人が殺されたという話を千畝さんは聞きました。でも、千畝さんと幸子さんは心からユダヤ人の無事を祈っていましたので、あの時ビザを書いてよかったと思いました。

千畝さんは、戦後（戦争が終わった後）幸子さんと二人の子どもを連れて日本に帰ってきました。

普通外交官はすぐに帰れるものですが、千畝さんたちはなかなか帰ることを許されず、帰ることができたのは、戦争が終わってから一年半もたっていました。

外務省に行くとすぐにやめることを勧められました。そして、「君の仕事はもうない」と言われました。理由は教えてもらえませんでした。千畝さんは日本の外務省の命令を聞かないでビザを出したからだと思いました。

しかし、千畝さんは、

「私は、たとえ少しでも、ユダヤ人を助けたのだ。」

と、そのことを誇りに感じながら、いざぎよく勧めに従い外務省を辞めました。

諸国民の中の正義の人 千畝

1969年（昭和44年）イスラエルは、「イスラエル建国の恩人」として千畝さんを表彰しました。千畝さんは、初めてイスラエルを訪れ千畝さんのビザによって助けられ当時宗教大臣となっていたバルファアティックさんから勲章をもらいました。

1985年（昭和60年）イスラエルは、千畝さんを「諸国民の中の正義の人」として再び表彰しましたが千畝さんは八五才、身体が弱ってイスラエルに行くことができませんでした。千畝さんは、1986年（昭和61年）鎌倉で亡くなりました。

八百津町は、千畝さんの人道的なおこないをたたえとともに、ずっと先まで千畝さんの行ったことを残すために「人道の丘公園」をつくりました。

出典「わたしたちのまち 八百津」 八百津町 小学校社会科副読本

（昭和五十七年三月三十一日初版発行 平成二七年三月三十一日改訂二版発行

八百津町教育委員会）